

松本 一郎『横浜における簡易宿泊所街の変遷
—1990年代後半の寿町を中心に—』について

本論文は、横浜市寿町の簡易宿泊所街の変遷を同地域の地図を収集し、それを時系列的に分析する傍ら、寿町に関する他の各種統計資料で補いつつ、特に1990年代後半以降の同宿泊所街の実際や機能の变化ないし特徴を把握することが狙いであるらしい。その結果、得られた（主要と思われる）結論は、1995年以降、簡易宿泊所街の拡大が続いている、その背景として日雇い求人の減少がありながらも、高齢化等の影響もあって被保護世帯の増加があり、その住宅需要を見込んで業者が新築・改築を行ってきた事情がある。加えて新しい簡易宿泊所はエアコンなどの設備も改善しているが、心身機能が衰えつつある被保護者の「終の棲家」になりつつあることから、経営上の採算性を確保しながら長期的な居住性も確保することが今後の課題であろう、というのが本論の大要であろう。

さて、横浜市寿町の簡易宿泊所街は論者が指摘するような変化が存在することは、寿町にさまざまな関わりを有する関係者からみれば、すでに感じていた「変化」であろう。本論文はこうした変化を時系列的な「地図」の収集という質的なデータの分析と、客室数や地域の人口、被保護動向を示す各種統計などを動員することによって、実証的に明らかにしようとするその姿勢は評価すべきであろう。また「地図」それ自体をさまざまな情報を内包する可能性を持った基礎的データとして着目した点はユニークである。こうした本論文が有する価値を認めた上で、若干の（私が感じた）疑問ないし要望を提示したい。

第一に、本論文の目玉ともいえる収集された「地図」の分析から、一体、どのような新たな情報が得られたのか、それが本論の論旨といかなる関連を有するのか、という点をもう少し具体的に論じてほしかった。

第二に、簡易宿泊所街の変遷を探ることがテーマであるというが、簡易宿泊所の経営問題に半ば焦点があるような印象も与える。それは論者の意図ではなかったはずであろう。であるならば寿町で暮らす人々の（福祉課題としての）居住問題として、焦点をもっと当てる必要があったのではないか。

第三に、近年の簡易宿泊所が生活保護と密接な関係を有するということであれば、横浜市寿町の簡易宿泊所への居住実態が、生活保護法でいう健康で文化的な最低生活を実際に満たしているかどうか、という点もいずれ検討を要する課題である。論者に期待したい。